

第三十四篇 ダビデ、アビメレクの女へに狂へる狀をなし遙れてひびきたり

作れるうた

ハ われ故改めしへ故をゆひへき道にみちびき。われば目をなんらに注てひとばん。故改等わざせへなま
馬のとく馳走のとくならぬかれ。かれらの鍼たうのでとさ具をもてひざでめず。近づききたるて
をなし。惡者のかなしみ多かれ。本ハに依頼じもの内體にてかまれん。たゞしき者より本ハを書
びたのじめ。凡ててしらの直きものよ喜びよはふべし。

自八至三十三篇十七節

第三十五篇

かひてうの跡を地より斷滅しながふ。義者さけびたれ。エホバぞきしてうのゆべの患難よりたず
けいたじたまへり。エホバの心のいたみかなしめる者にらかく在してたゞしひの悔願れたるものとす
ひだれふ。たゞじきめの患難かほはじ。ひもでエホバのみならぬの中からすけいだじたまふ。
かかねがすべての骨をかみたりあふるの一つに折るゝことあり。悪くわしらのをつぶさん。義人を
かかねがすべての骨をかみたりあふるの一つに折るゝことあり。悪くわしらのをつぶさん。義人を
かくもものへ刑なはるべじ。エホバの儀事のためしあひを贈びたまふ。エホバに依頼むものひへだ

第三十七篇 フビデのうた

かなら打伏されてしまつたのであるが、足わらみ思ひの手を運去えゆるじ給ふなけれ 邪曲をかこなふ者のかしこに小きたり
あんち知るのみにたゞおもはれはして心なほひ者かたへお正義をほこじたまへたかぶもの
飲じめたまへん うらりのうの泉の泉に在り。われらなんぶの光よりて光をみん + ねがく
得えへなんらの屋ゆたかなるおもてててとへへ飽く。あんぶらうの歌樂のかまの水をから
けめりたまふ 神おみかのじ謡ふたふにせかめ入の子のあんらの翼の陰にびにてろど
にはかりよからぬ途にたまはりて思をばはす 五 本あるんがのじ謡ふ天にありなんらの眞實の雲
にゆべらる。汝のたゞじゆうの山の山へ、あんみの審判の神らめらるる淵なり。エ フ よなみが人の人
にゆべらる。汝のたゞじゆうの山の山へ、あんみの審判の神らめらるる淵なり。エ フ よなみが人の人
とかしも虚偽にて智とこみせば かしも寝床にてこじゆる事を
かれづが邪曲と虚偽にて智とこみせば かしも寝床にてこじゆる事を
かのじゆるが邪曲のむべからずとく憎みがてかかれて自かじるの目にて詔め三 うの口のこ
かのじゆるが邪曲のむべからずとく憎みがてかかれて自かじるの目にて詔め三 うの口のこ

第三十六編 俗長にうたはしめられるエホバの儀式ビデのうた

それが吉日終日あんちの義理であんちの譽をかたらん
する者どへ、何てび語はじめ大あるかな。ホーリーの神のひはひぞ悦びたまふに恒くはじめかせ入
て悦てふためき。我おひかひてはこりかに高ぶるみのいはづかじめとを表えてどぞ。わが義をよみ
なれ。又わからかきを者つぐせりはじめたまふがかれ願へぬわが害なもるしを喜ぶもの皆はぢ
なれ。又わからかきを者つぐせりはじめたまふがかれ願へぬわが害なもるしを喜ぶもの皆はぢ

「お、どうぞはへりて書をめし我せめ。ほんじて筆をもて我そしてらしめ繪とあられ。なんらの矢か
れにあた。かくへて筆をめし我せめ。ほんじて筆をもて我そしてらしめ繪とあられ。なんらの矢か
れ思ひか。思ひかにてわき。傷あき臭をはなちて腐れたり。われ折風でいたくなげきうなれたり。わ
れ終日かなしみやへ。わぶらじてへくへくへくへくへくへくへくへくへくへくへくへくへくへくへ
て甚くしつけられ。わが心のやすからぬがによりて歎き。わよわがよへての願望へ不
なんちの前にあり。わの嘆息のふんちに懐もんみゆめし。わが胸をさりわが力ゆべつゝへ。わの眼のひかりも
亦われはなれたり。わが友わが親めるもののが病みて遙にたち。わが隣もまた遠かられてたり。
わが生命滅たらぬるもののか。わの口どひからぬ隣者のごくじ。如此われれきかゆる人
る十三。然ひあれど。われは隣者のがくつか。わの口どひからぬ隣者のごくじ。我あんちを隔壁めり。主わが神。よあんちがからゆる人
答へたまふ入けれど。われ農にうふ。わるらへりかれらわの事によりて喜び。わの足のすへらえゆ
我にひかひて語りかにたかぶらん。われ体のしゆかりになりぬ。わの隣農へえすわの副にゆり
我みづから不義をいひかじ。わの罪のためにかしなじめむ。わの仇ひらきへたらひてたけく。故に
なくして我抜らむるもののはじ。惡をもて善にむくゆるものうわれ事にめたふ。故にわの仇に
れら二三。おほかねのへり我ぬれたまふなから。わの神よわれに遠かりたまふなから。主わの仇に
ひよきたりて我をたすけよへ

第三十八篇 記念のためにくれるダビデのうた